

共生共育論再考

曾 和 信 一

四條畷学園短期大学

A Reconsideration on the Theory of Living and Growing Together

Shin-ichi Sowa

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第49号 別刷

平成28年5月31日

## 共生共育論再考

曾 和 信 一 \*

### A Reconsideration on the Theory of Living and Growing Together

Shin-ichi Sowa

本稿では、嚆矢として『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』で、ムヒカ大統領が国際会議の場を通して訴えかけたものから、私たち一人ひとりの生き方において問いかけるものとは何かについて言及した。それに次いで、共生論の再考というテーマでもって、私たち自身が生きていくうえで抱えざるを得ない、“競争と競生”と“共創と共生”の間での社会的価値の争奪と創出にかかるパラダイムシフトの内実について考察した。そして、共育論の再考を主題に、人間形成の教育の再考と併せて、その問い直しを通して、生き方の選択肢のひとつとして、共育の創造への試論を展開したところである。

**Key words:** 『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』、敗者復活のある競争、共創と共生の創出、人間形成としての教育、生き方としての共育

#### はじめに — 『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』が問いかけるもの

南米のウルグアイのムヒカ大統領（当時）は、2012年にブラジルのリオデジャネイロで、環境の悪化が止まない地球の未来について議論する国際会議の場において、参加した聴衆の心の琴線に触れる演説を行った。その演説を一冊の絵本にして上梓したのが、『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』である。その絵本の内容に即しながら、大統領が問いかけるものについて考えていくことにしよう。<sup>①</sup>

ムヒカ大統領は、その国際会議の場で、人々が世界から貧困をなくすにはどうしたらよいのかということを考える一方で、より豊かになり、自ら欲するものが手に入るといった裕福な社会を望んでこなかったかと会議に参加した聴衆一人ひとりに問いかけた。自分が人よりも豊かになるために、競争（competition）を繰り広げる世界に身をおきながら、「心をひとつに、みんないっしょに」という話ができるのかという、私たちの齟齬をきたした生き方に対する問いかけを行った。

そこから帰納（Induction）するかのように、いま眼前にある危機とは、地球環境の危機ではなく、私たちの生き方の危機であると喝破した。また、そのような危機をもたらしたのは、自らが生きるために作りあげた仕組みをうまく使いこなせず、むしろその仕組みに起因するものであるとも指摘した。

その現代文明の批判（criticism）について、喜劇王の異名を有するチャーリー・チャップリンが1936年に製作と監督をした映画である『モダン・タイムズ』で提起した問題が想起される場所である。その映画において、欲望（desire）の虜となった資本主義社会のあり方それ自体を批判するとともに、機械文明を完膚なきまでにコミカルに風刺（satire）した。思うに、民衆は、いずれの時代においても、時の権力者への滑稽さを交えた嘲笑といえる“嗤い”を、不当な権力の側の容喙への抵抗の武器として強かに用いてきたといえよう。

ムヒカ大統領は、チャップリンの機械文明の批判に呼応するかのように、いまなおその欲深さの妖怪に憑依された現代文明を痛烈に批評（critique）した。大統領は、古代の賢人で、快楽主義（epicureanism）などで知られる古代ギリシアのヘレニズム期の哲学者であるエピクロス、ローマ帝

\* 四條畷学園短期大学 保育学科

国時代のストア派哲学者として著名なセネカ、そして南米のアンデス地域に暮らす先住民民族であるアイマラ民族などの言葉を承継して、「貧乏とは、少ししか持っていないことではなく、かぎりなく多くを必要とし、もっともっととほしがることである」と聴衆に訴えかけた。

現代という時代が直面している危機とは、果てしなく欲望を募らせてきた結果としてもたらした“幸せ”の中身にあると、「世界でいちばん貧しい」大統領は指摘した。そして、私たち自身が吝嗇(stinginess)に囚われの身となっている生き方こそ、見直していく必要があることを力説した。更に、“幸福”及び“発展”とは何かについて、次のように言及している。

「社会が発展することが、幸福をそこなうものであってはなりません。発展とは、人間の幸せの味方でなくてはならないのです。人と人とが幸せな関係を結ぶこと、子どもを育てること、友人をもつこと、地球上に愛があること——こうしたものは、人間が生きるためにぎりぎり必要な土台です。発展は、これらをつくることの味方でなくてはならない。(中略)人類が幸福であってこそ、よりよい生活ができるのです。わたしたちがよりよい生活をするためにたたかうとき、これをおぼえておかななくてはなりません。」<sup>(2)</sup> という言葉でもって、傾聴する一人ひとりの心に感銘を誘ったスピーチの結びとした。

かかる大統領の「幸福と発展」についての言説(discourse)に触発されるものがある。“幸福”という概念について、プータンの「国民総幸福量」(GNH)の考え方が、また“発展”概念については、「内発的発展論」の考え方が、その通奏低音において一貫して関連していると思われる。

そこで、「国民総幸福量」(GNH)という考え方から見ていくことにしよう。国民総幸福量とは、ヒマラヤの地にあって「幸せの王国」として人口に膾炙されたプータン王国の国王の提唱で始まったものである。それは、国の政策の指標(Merkmal)として採り入れられた国民全体の“こころの豊かさ”を示す幸福度を重視しようとする考え方である。その考え方が打ち出されるまで、幸福度を図る指標としての国民総生産(GNP)にせよ国内総生産(GDP)にせよ、それらの経済指標は一国の社会全体の創出する経済的なものの生産や物質至上主

義にバイアスがおかれたものであった。“ものの豊かさ”を数値化した経済の成長指数だけが国際社会における国の評価となり、国民生活の度合いを示す基準となって闊歩してきた。そのことに対して、国民総幸福量という評価の目印となるものを提起することで、グローバル化化する資本主義に一元的に収斂されてきた価値観に対して一石を投じたのである。

内発的発展論については、高度に発達した資本主義化論といえる近代化論や市場原理主義ともいえる新自由主義(Neoliberalism)論への対抗概念として、発展(開発)途上国の人々自らが地域格差や環境破壊の歪みを糾す方向で、地域の発展を企図した論理展開のひとつである。その発展論は、発展の目的を地域の発展を担う当事者の生き方における選択能力の拡充に重点を置き、発展(開発)途上国の地域の発展に占める集団や個人の役割を大切にした所論である。

その内発的発展論と関わって、植民地主義と帝国主義を批評し批判するポストコロニアル理論(Postcolonialism)の先駆者として、アルジェリア独立運動のイデオログの役割を果たした思想家で精神科医のフランツ・ファノンが、「橋をわがものとする思想」として、次のようにその所説を述べている。

ひとつの橋の建設がもしそこに働く人びとの意識を豊かにしないものならば、橋は建設されぬがよい。市民は従前どおり、泳ぐか渡し船に乗るかして、川を渡っていればよい。橋は、空から降って湧くものであってはならない。社会の全景にデウス・エクス・マキーナによって押しつけられるものであってはならない。そうではなくて、市民の筋肉と頭脳とから生まれるべきものだ。なるほどおそらくは技師や建築家が必要になるだろう——それもときには一人残らず外人であるかもしれない。だがその場合も党の地区委員がそこにおいて、市民の砂漠のごとき頭脳のなかに技術が浸透し、この橋が細部においても全体としても市民によって考え直され、計画され、引き受けられるようにすべきなのだ。市民は橋をわがものにせねばならない。このときはじめて、いっさいが可能となるのである。<sup>(3)</sup>

橋をわがものとする思想とは、たつきを立てる

生活者である市民にとって、自らの意識を豊かなものにしない橋づくりを峻拒するものの見方、考え方、感じ方である。とは言っても、そこでいう橋とは、物理的な意味での橋を意味するのにとどまらずに、精神的に植民地主義と帝国主義に囚われているという意味での人々の心を拘束してやまないシステムを指したものである。そのようなシステムを市民の筋肉と頭脳でもって主体的につくり変えていくことの必要性を訴えているといえる。なお、ファノンの言う「デウス・エクス・マキナ (Deus ex machina)」とは、古代ギリシアの演劇におけるご都合主義的な演出技法のひとつで、「機械仕掛けから出てくる神」を意味した言葉である。

前述した内発的発展論に基づき、インド独立の象徴的存在といえるマハトマ・ガンジーは、自らの手で未来を紡ぐ“自立の思想”としての“手紡ぎ車の思想”といえる自立分散 (autonomous distributed) 型の生産と分配のシステムを紡ぎだしたことで著名である。とは言っても、そこでいう自立分散型の社会システムとは、分散すればするほどに集中し、集中すればするほどに分散するものであり、結果的には共創的ネットワークの構築を目指したものである。

ガンジーは、そのようにしてグローバルな商品市場の経済に異議の申し立てを行い、自分たちで自らの糧を得ることで、民衆のための国家の建設という未来への指針となりうる思想を展開したといえる。また、ガンジーの思想の系譜を引き継ぐ形で、社会的経済的貧困層の人々に対して、金融面でのサポートを行ってきたバングラデシュの銀行であるグラミン銀行は、社会的貧困層を対象に無担保の少額融資を行ってきた。そうすることによって、貧困層が経済的・社会的基盤を構築し、その社会的自立を支援してきたことへの貢献が高く評価された。そして、グラミン銀行の活動は、2006年にノーベル平和賞を受賞したことで、一躍国際的に脚光を浴びたのである。

## 1 共生論を再考して——“競争と競生”と“共創と共生”の間で

企業小説（経済小説）の名手と呼ばれる高任和夫氏は、その著書である『敗者復活戦』の中で、自然環境を色濃く残しながらも老朽化した大型団

地である虹が丘団地を舞台にして、そこに暮らす定年前後の仲のよい知り合いの3人を登場させ、三者三様の『敗者復活戦』に挑む姿を描いている。<sup>(4)</sup>

その小説の概要について、次の通りである。総合商社の監査部部長補佐という定年間際の彦坂祐介は、3億円という巨額の負債を残し失踪した同期の友の捜索に行き詰まりを見せる。都市銀行の支店長で定年を迎えた雨宮英夫は、その後退屈な日々をもてあまし、アルコール中毒に至るまでの酒浸りの日々を過ごしている。河合健太は、会社を定年退職した後、多様な趣味生活が高じて、100日間の世界一周旅行に出発する。アラ還世代といえる3人の登場人物が、新たな女性とのおとなとしての出会いを絡めながら、それぞれが自らの置かれた状況を切り開いていく姿を活写した小説である。

高任氏は、その著書の中で、「勝者とは出世した人間のことで、敗者とは出世しなかったやつのことだ、というシンプルな人生観」<sup>(5)</sup>を否定する。むしろ定年で退職しても、いま情熱を傾けられ、心が豊かになる何かをもっているかどうかはその分水嶺であるように、その著書の行間から読み取れるであろう。

ここで、ムヒカ大統領が前述したスピーチの中で、生き方の危機として、自分が人よりも（物質的に）豊かになるために、繰り広げる競争の問題点について指摘しているが、その内実に立ち入っていきこう。そもそも競争とは、互いに同じ目標や目的の遂行に向かって、相手に先駆けてそれを達成することにより、その勝敗において自らを優位に立たせようとする行為である。そこでは競争に勝つことだけに意味を見出し、負ければ無意味であるといったように、人を“勝ち組”と“負け組”に篩に掛け、“勝ち組”のみが“価値組”と見なすという意味で、“競争のための競争”になりかねない側面を有しているといえる。

他方において、人間の社会とは競争によって進歩するという考え方が今なお根強く残っている。例えば「切磋琢磨」という言葉があるが、それは語源的には、骨は切り、象牙は磋ぎ、玉は琢ち、石は磨くといったように、精細な加工を施すことを意味したものである。そこから、競争とは互いに競い合うことで自分というものを探究し、研鑽しあって高めあうことを含意したものであるといえよう。その意味で、競争という考え方は、一概

に全否定するものであるとは必ずしもいえないのである。

むしろ自らが自らと向き合い格闘することで、自らが立てた目標や理想の実現や、自らが抱く興味や関心を高めるべく、恰も合わせ鏡のようにして、自分の中の自分を見つめることが大切なものになってこよう。それは他者との関係においても、どちらが自分により厳しく向き合っているのかを認識することである。また、競争のための競争を乗り越える試金石として、社会的に“敗者復活戦”を認めるかどうかということが挙げられる。というのは、情熱を傾け、心を豊かにするために再挑戦することを認められない競争とは、一步間違えれば人を選別するだけの手段になりかねないからである。

以上のような“競争”の考え方を踏まえて、“共創”という考え方への転換について考えていくことにしよう。

“共創”について考えていく際に、生命関係論の研究者である清水博氏と企業人としての前川正雄氏という異なった職種の二人の対話が示唆に富んでいる。<sup>6)</sup>そこで両氏の所論に依拠しつつ、共創という概念について検討していくと、清水氏は「世界と共感することが創造の第一歩でしょう。根本的にいえば集団的な創造とは元来、他とともにするもの、『共創』だと思ふのですよ。」<sup>7)</sup>と言及している。そこでいう“共感”について、清水氏は母親と新生児のコミュニケーションを取りあげ、「共感とはなにかというと、場所をおなじくし、おなじ場所にいっしょに身体を置いて、ともに感じている状態を声に出していくことだと思うのです。」<sup>8)</sup>という。

思うに、母親と新生児のコミュニケーションにおける共感とは、母親と新生児とが情動的一体感を生きる中で生じてくる情動的共感 (affection dynamic empathy) である。そのような一体感を生きる体験を通して、その子どもが乳児から幼児へと成長していくに伴って、自分のおかれている状況とは異なる相手の思いを推し量ることのできる認知的共感という感情の芽生えへと発展し変化していくのである。

ここで共感と呼ばれる感情の働きについて、別の視点からみていくことにしよう。江戸時代初期の禪師として著名な盤珪和尚の逸事 (anecdotes) に

ついて考察していくことにする。そのエピソードについて、次の通りである。姫路に、人の声を聞いただけで、その人の心がわかるという盲人がいた。その盲人は盤珪和尚に敬意を払い、常々次のように言っていたという。

凡人の祝いの言葉には、必ず愁いの声があり、弔いの言葉には、必ず喜びの声がある。人の情とはおしなべてそのようなものだ。しかし、盤珪さんだけは、利衰毀誉に際しても、尊卑老稚に対しても、いつもその声は変わらない。凡夫の常識を超えた尊い心の持ち主である。<sup>9)</sup>

要するに、人の音声に垣間見られる心の壁にあるものを聞き取れる盲人が言うには、凡人は人の喜びを妬み、人の悲しみを喜ぶものだが、盤珪和尚は人の喜びを共に喜び、人の悲しみを共に悲しむといった心の持ち主だということである。

私たち凡人にとって、人の喜怒哀楽を共に分かち合う意味での共感という感情を持ちうるものがきわめて困難であり、周囲からの同調圧力を受けることで「共感しなければならない」といったように、その感情は少なからず作為を伴わざるをえないものである。言い換えると、社会的に下される判断の枠組みといえる準拠枠 (frame of reference) の中に相手の感情を取り込んでしまうという問題である。その作為を囚わず、互いがあるがままに相手の気持ちに感応するという意味で、“相互感応する心”を育む感覚と関係性を大切にしていきたいものである。

清水氏の論理を敷衍して言えば、共感とは、母親と新生児の“交歓”とも言える愛情を伴った親しさでもって状況を分かち合い楽しむ気持ちである。そうすることで、共感とは、小さな同時代人としての新生児と親とが相互に対等の立場で、字義通りに一緒に飲ぶという意味での“共飲”へと発展し変化していくことでもって、相互感応することのできる感情作用であるといえよう。

ここで、前川氏と清水氏が言及する共創という概念の意味するところの内容について考えていくことにしよう。前川氏は、「共創できる人というのは、部分しか知らない専門家ではなく、全体性を掴むことのできる人でないとだめですね。部分だけに詳しい専門家を集めると共創ではなくて競争になってしまう。一方、共感している場を共有していれば全体を掴むことができ、共創につながる



というわけでしょう。」<sup>(40)</sup>と指摘する。

前川氏が言うように、部分合理性と全体合理性とは親和性が低く、乖離しがちなものであるといえる。経済学の専門用語(jargon)でいう局所最適解を見出すべく、その部分部分で最も合理的な方法を追求していくと、ケインズが『一般理論』で展開した“合成の誤謬(fallacy of composition)”といえるように、競争原理に基づいて、全体としてきわめて不都合な事態をもたらしかねないといった面を有している。全体の性質から一部分の性質について断定を下す間違いを意味する“分割の誤謬(fallacy of division)”に留意しつつ、前川氏は、組織やシステムにおいて全体の最適を図り、全体最適解を導き出すためには、共創という概念の重要性を強調している。

前川氏のその発言を受けて、清水氏は次のように応答している。

「共感」があって「共創」になりますね。いまおっしゃたように、「共に創る」わけですから、まずは話しあう場所をともにして、共感できる場をつくることですね。問題を共有し、一つの場のなかで頭を寄せあってあれこれ話しあううち、イメージが互いのあいだでどんどん成長し、またそれにつれて共感の領域が深まって新しい創造的な活動が起こってくる。そうしてはじめて、言葉で表現できるところまで行き着く。<sup>(41)</sup>

「共に創る」というという際に、「競争のための競争」を乗り越え、誰と何をどのようにしてどこまで創り出そうとするのが問われてこよう。思うに、誰と共に創るのかということ考えた時、まずほとんど社会的に無力な存在ともいえる保育期と呼ばれる乳幼児期、とりわけ乳児期において、子どもはかけがえのない大切な人(significant person)のケア(世話行動)を受けることで、自己受容感に充たされ、情動的一体感を生きる中で、相互に感応する関わりを創り出していくといえる。また、思春期から思秋期に至るまでの時期において、誰と、いまを、どこで生きるのかという意味で、「自立と共生」のあり方が問われてくる。そして、非力な存在となっていく老年期は、生活面での周囲の介助を必要に応じて受けることで、自らの要求を充足することができる時期である。

思うに、私たち人間は豊かに“弱さとしての強

さ(strength as weakness)”をもって共に生きられる存在である。それに対して、“強さとしての弱さ(weakness as strength)”という思考の組み立ては、「競争のための競争」によって、「競生」と「排除」に貫かれた「社会的強者」の論理である。社会格差の拡大を容認してやまない「競生」と「排除」の論理から、包摂(subsumption)の論理へと価値観を転換していく方法論の構築こそが、私たち一人ひとりに問われてくる喫緊の課題ではないだろうか。

こうして時系列に人間存在について考えていく時に、人間とは、何時の時期においても、かけがえのない大切な人や仲間と共に、いま(時間)、ここで(空間)を充実して生きるという意味で、三つの“間”を生きる存在であることに気づかされよう。また、「自立と共生」の関係においても、「自立」なき「共生」は真の「共生」ではないし、「共生」なき「自立」は真の「自立」ではないといえる。その意味で、「自立と共生」の関係とは、相即不離といえるものであり、表裏一体を成す関係でもある。そこでいう「自立」とは、私たち一人ひとりが自らの生き方を自らが選び取り、決めていくことを意味したものである。その「自立」に向かう過程において、相互に自らにとって大切な他者の手助け(assistance)又は支援(support)が必要であり、「競生」と「排除」から「共生」と「共助」の関係を紡ぎだしていく中で、言葉の真の意味での「自立」というものを成就していくことができるのである。

## 2 共育論を再考して——人間形成の教育の再考と生き方としての共育の創造へ

この節では、人間形成としての教育の再考と共に、生き方としての共育の創造へと発展していくために、何がどのようにしてどこまで必要なかということについて考えていくことにしよう。

そこで、まず人間形成としての教育を再考するに先立って、そもそも教育とは何かという定義の問題から考察していくことにする。そのことについて考える際に、まず想起するのは、近代ヨーロッパの教育思想に通底する“陶冶(Bildung)としての教育”である。

思うに、近代教育思想について論じる際に、その先駆者としてルソーが必ずと言ってよい程に狙

上に載せられるが、彼が『エミール』の「第一編」の中で、「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる」<sup>(12)</sup> という、所謂“消極的教育”を説いた名言がある。また「子どもは小さな大人ではない」と主張し、「子どもの発見」がなされ、それによって教育という活動の意義を明らかにし、その活動を省察することで教育学としての成立を見るに至ったのである。

ルソーの教育思想の衣鉢を継ぐかのように、スイスの教育実践者であるペスタロッチは、祖国の貧民の子どもや身寄りのない孤児と呼ばれる子どもなどの初等教育に、その晩年に至るまで心血を注いだことで知られている人物である。ペスタロッチは“人間性の陶冶”の土台を家庭と初等教育に求め、子どもの自発的活動を重んじる直感的方法による教育実践を唱導したといえる。

ペスタロッチの“人間性の陶冶”に基づく“人間教育”の思想と実践に触発され、その教育を体系化したのがフレーベルである。彼は「幼児教育の祖」といわれるように、ペスタロッチの影響を色濃く受けるとともに、その初等教育の方法論を幼児期の子どもの教育に適用して、幼児教育の学校といえる幼稚園 (Kindergarten) を創設したことで、世間に広くその名が知られている。

ルソーの教育思想に端を発し、その思想に啓発され、初等教育の実践を行ったペスタロッチと、その影響を強く受けたフレーベルによる幼児教育の実践などを省察し、教育を学問として確立すべく格闘したのがドイツの教育学者のヘルバルトである。彼が著した『一般教育学』は、近代教育学の出立点に位置づけられるものである。その著作物において、“強固な道徳的品性の陶冶”を説き、その概念を究極の教育目標として措定したことは、教育研究者の間ではよく知られたことである。

ペスタロッチの説く“人間性の陶冶”にせよ、ヘルバルトの主張する“強固な道徳的品性の陶冶”にせよ、“陶冶としての教育”が近代教育学を論じる際の主要なキーワードのひとつである。確かにビルドゥンク (Bildung) の訳語として嘗て“陶冶”が宛がわれていたが、その訳語はそもそも陶器と冶金の合成語である。そこでいう陶冶とは、陶器を作ったり、金属の精製、加工をしたりするように、鋳型に合わせて、焼き固めるといった意味合いが

ある。そこから敷衍して、人間の陶冶とは、社会が望ましいと看做す鋳型に嵌めて、教師の意図のままに教育するといったような誤解を招きかねないということ、最近では教育用語としてあまり使われなくなってきたといえる。とは言っても、ドイツ語のビルドゥンク (Bildung) とは、人間形成としての教育を意味しており、教授法的な教育の概念である。

その陶冶という概念と密接な関係にある教育の概念に“訓育 (discipline)”という言葉がある。その discipline には、躰や規律という意味があり、教育の目的を達成するために、知識の習得を目指す“教授”に対して、子どもの感情や意思などを涵養して、その社会にとって望ましい人格の形成を意図するという意味で、“徳育”の要素が色濃い教育の概念である。

陶冶にせよ訓育にせよ、いずれも人間の人格形成に関わった教育上の概念であることは確かである。そもそも巨大な社会現象としての教育とは、人間の (自己) 形成に働きかける社会的営みである。人間とりわけ子どもは、自分というものを形成していく過程で、様々なことを学習するが、それは社会、自然、文化との働きかけあいの総体 (ensemble) でもある。つまり、子どもの人間としての形成には、被形成者として「つくられるもの」という側面がある。何がつくられるかと言えば、自分たちの前の世代までの人々が営々と築きあげるとともに蓄えてきた知識や技能 (skill)、言語などの文化遺産を受け継ぐという意味で、それらを継承すべく、人間がつくられるのである。別の観点から捉えると、教育が人間の被形成としての陶冶や訓育であるという意味で、社会とその文化遺産の継承としての連続性の側面が重視されてこよう。

それと同時に、子どもは主体的自己形成者として「みずからをつくりかえるもの」といった面を有している。言い換えると、教育者という人的環境や自然の環境などから様々なことを学習することを通して、自らのおかれた状況を対象化し、社会、自然、文化などへの具体的な働きかけとしての実践的活動に取り組むようになる。その一連の実践的活動を通して、自分らしくある感覚といえる本来感 (sense of authenticity) とともに、自分というものに価値があると思える感情である自尊心や、自分は大切な存在であるといったように、

その存在意義を肯定できる自己肯定感 (feeling of self-affirmation) 及び自分が人の役に立っていると感じ取られる自己有用感といったものを、子ども自らが育んでいくのである。

その一連の過程において、子どもは、被形成という作用から解き放たれて自由になり、形成の中身をつくりかえていくことができるようになる。つまり、子どもの実践的活動によって、人間の被形成でいうところの連続性を断ち切ることで、新たな高次の連続性へと発展していくといえる。だから、人間形成としての教育とは、社会現象としてその被形成と主体的自己形成とのダイナミックな展開の過程の中にある人間社会の永続的な営みだともいえるのである。

教育とは何かという定義の問題に次いで、共育という問題について考察を進めていくことにしよう。“共育”を「社会共同の子育ての営み」として捉えると、そこでいう子育てとは何か、また、その子育てと関わって、その前提となる子育てとは何かを明らかにしていく必要があるだろう。

そこで、まず子育てとは何かという問題から考えていくことにする。子育てとは、子ども自身も持っている学びへの意欲に支えられての子ども自身の育ちであり、子どもが持っている自らの生きる力としての自己成長力を社会の中で育む営みである。そこでいう自己成長力とは、人間や自然との関わりにおいて自らの生きようとする内面から湧き出る力を指したものである。言い換えると、それは、共に生きる力を基底として、いきいきと自らを表現するとともに、他者に自らを開いていく力である。別の視点からいえば、子育てとは、自分の可能性を切り開くべく、保護者である親のもとから離れて自立していくという意味での“子どもの親離れ”である。

そのような子育てがあり、それを育む社会共同の営みとしての子育てがある。そこでいう子育てとは、“親の子離れ”でもある。というのは、保護者としての親が子離れ（子どもからの自立）をしなければ、子どもが本来持っている成長と発達の可能性を摘んでしまいかねないからである。その親の子離れとしての子育てを通して、育てるおとな自らが育つという意味で、子育てはおとなと子どもの“己育て”である。言い換えると、育児とは、子どもを育てることで育てようとするおとな自ら

が育ち、結果として親と子どもが共に育ちあうという意味で、共育ちとしての“育自”でもある。

子育てにとって必要不可欠な場（空間）とその関係として、地域社会 (community) が挙げられよう。そこでいう地域とは、理念的に言えば、地域住民が生活を共にして活動するという意味での共的な領域としての場である。子育てはそのような地域社会において存在してきたのではないだろうか。つまり地域共同体 (Gemeinschaft) を維持し発展するために、前近代から長い年月に亘って、“習俗 (mores) としての子育て (子育ての習俗)” が地域住民の手によって行われてきたのである。

それでは、そこでいう“習俗としての子育て”とは一体何を意味しているのか。日本社会では、かつて「兒やらひ」と呼ばれる子育てのし方が一般的に多くの地域社会で行われていた。民俗学者の柳田国男は、その「兒やらひ」について、「ヤラヒは少なくとも後から追い立て又突き出すことでありまして、ちやうど今日の教育といふものゝ、前に立つて引張つて行かうとするのとは、まるで正反対の方法であつたと思はれる」<sup>(13)</sup> と言及している。つまり、近世から近代にわたって、もうすでに成熟したおとなが成長しつつある子どもの自ら育つてゆく力を信じていたのではないか。そして、そんな子どもを見守り、世の中（世間）に押し込めて、後ろから支え導こうとするところに、習俗としての子育てがあった。帯祝いから始まり、お七夜、お宮参り、お喰い初め、初誕生祝い、初節供や七五三で晴れ着に身を包み、神社へお参りに行くといった年中行事における通過儀礼 (initiation) をとりあげるまでもなく、それらは子育てとしての養育の原初的な形態として、地域社会の中に息づいていたのではないかと思う。

また、近代において（両）親が子どものうちのひとりだけを後継者と定めて、その夫婦と同居する家族形態である三世代の直系家族が多く見られた。その家族形態から、現代の夫婦とその子どもとからなる核家族化への進行は、地域に生活する人々にとってその関係性を個々バラバラに切り裂き、共生共育でいう“共”なるものを喪失させていくことになった。そして、家庭の養育力は著しく低下の一途を辿った。その結果として、“母子カプセル”と呼ばれる状態の中で、孤立感や不安感などを益々募り出してやまない状況となってきた。



そのことが子どもの虐待の一層の増加に拍車を掛ける要因ともなっている。

この子どもを取り巻く状況の変化について、一方では、地域、家庭、習俗などの子育て（養育）にかかる力が萎えていくのに対して、他方では、学校の教育力が相対的により一層強まってきた。この意味で、孤立した自分本位の子ども育て（養育）という意味での「孤育て」が、学校教育における偏差値というものさしを優位とする能力至上主義教育（競育）の横行と相まって、一層進行してきたともいえる。

昨今、“孤育てとしての子育て”と“競育としての教育”に対して、批判的な意味での問題意識をもった地域住民が少なからずいる。それらの人々を中心として、そのような状況への異議申し立てを行ってきた。また、教育者（保育者）などの教育（保育）の専門家と保護者の間にある垣根を低くすべく、あるいは溝を埋めるべく、地域住民としての両者が手を携えて、地域共同の子育てに取り組もうとしてきた。保育所、幼稚園、認定こども園やそれら以外の子どもの生活の施設などを、地域における共同子育てのセンターとしての機能をもたせようとしてきたことも、そのような取り組みの表われである。

とは言っても、地域に根ざした実践的取り組みは、その当事者の努力にもかかわらず、点（dot）と点を結ぶ線（line）にまで十分に至っていないのではないかと。今後の課題として、高齢者の社会的介護の問題の解決に向けての取り組みと相まって、子育ての孤立感や不安感などを地域社会の住民が共同して取り除いていく必要がある。地域共同の子育てとは、次世代を担う子どもへの支援にとどまらずに、その子どもが成人となり、次々世代を切り開く子どもの育ちと育てを射程に据えての永続的な社会的営みであることを認識していきたいものである。そして、共生共育の関係を創出する方向で、点を結ぶ線と線とが縦糸となり横糸となり、織りなしあって、複合的ネットワーク（compound network）をどのようにして構築していくのかが問われてくる。そのことと関連して、地域住民一人ひとりが対等の立場で、子育てなどに関わっての共通の関心事を自由に語らえる新たな公共圏（Öffentlichkeit）を、どのように創り出していくのかということに向けての実践的取り組みの

展開も喫緊の課題となってくるのである。

#### 【注】

- (1) くさばよしみ編、中川学絵『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』汐文社、2014年。
- (2) くさばよしみ編、中川学絵『前掲書』28～31頁。
- (3) フランツ・ファノン（鈴木道彦、浦野衣子訳）『地に呪われたる者』みすず書房、113～114頁、1969年。
- (4) 高任和夫『敗者復活戦』講談社、2008年。
- (5) 高任和夫『前掲書』22頁。
- (6) 清水博、前川正雄『競争から共創へ——場所主義経済の設計』岩波書店、1998年。
- (7) 清水博、前川正雄『前掲書』44頁。
- (8) 清水博、前川正雄『前掲書』38頁。
- (9) 禅文化研究所編『盤珪禅師逸話選』禅文化研究所、82頁、1992年。
- (10) 清水博、前川正雄『前掲書』44頁。
- (11) 清水博、前川正雄『前掲書』44頁。
- (12) ルソー（今野一雄訳）『エミール 上』岩波書店、23頁、1962年。
- (13) 柳田国男『定本 柳田国男集 第二十三巻』筑摩書房、235頁、1970年。

#### 【参考文献】

- (1) 外前田孝『屈せざる魂』鉱脈社、2010年。
- (2) ベスタロッチ（梅根悟訳）『政治と教育』明治図書、1965年。
- (3) フレーベル（岩崎次男訳）『人間の教育 1、2』明治図書、1960年。
- (4) ヘルバルト（三枝孝弘訳）『一般教育学』明治図書、1960年。
- (5) 勝田守一『勝田守一著作集 第4巻 人間形成と教育』国土社、1972年。
- (6) 岩波講座 現代の教育 第5巻『共生の教育』岩波書店、1998年。
- (7) 仲田直『共生教育のすすめ』ミネルヴァ書房、2000年。
- (8) 徳田茂『子育ては自分育て』青樹社、1996年。
- (9) ユルゲン・ハーバーマス（細谷貞雄、山田正行訳）『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』未来社、1994年。

— 2016. 3.29 受稿、2016. 3.30 受理 —